

Juichi WAKISAKA Race Report

2013 AUTOBACS SUPER GT Round 3 -SUPER GT INTERNATIONAL SERIES MALAYSIA-

◆◆ チームの総合力を駆使し、強いレースを披露。2位表彰台へ！ ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦 宏明	4位	2位

開催日：2013年6月15日-2013年6月16日

サーキット：セパン国際サーキット（マレーシア、コース全長：5.543km）

レース距離：54周（299.322km）

入場者数：予選日41,000名、決勝日67,000名、合計108,000名

早くも今シーズン前半戦の締めくくりを迎えた SUPER GT。第2戦富士からおよそ1ヶ月半ぶりの闘いは、唯一の海外戦として知られるマレーシア・セパン国際サーキットが舞台となる。F1GPも開催されるかの地に乗り込んだ No.39 DENSO KOBELCO SC430。前回の富士でチームとして進むべき方向、取り組む課題がよりいっそう明確となったと脇阪が口にしたとおり、このセパンでは実際にそのいい流れをもってメニューを消化することが実現した。まず予選では、脇阪が6番手のタイムでノックアウト方式の予選 Q1 を通過。バトンを受けついで石浦宏明選手は Q2 で4番手となるベストタイムをマークした。決勝では、自分たちのレーススタイルを守りつつも、駆け引きの多い闘いの中で力走。今シーズン初となる2位表彰台を獲得する活躍を見せ、同時にシリーズランキング3位へと浮上することとなった。



■ 6月15日(土)

13:00-15:00 公式練習

16:45-17:00 ムックアウト予選 (Q1)

17:30-17:42 ムックアウト予選 (Q2)

【公式練習】 1番手 / 1'56.710

午後1時にスタートした公式練習。国内同様、GT300との混走を経てGT500の専有セッションが行われる。走り始め、いつもならコースコンディションが芳しくないセパンだが、今年はサポートレースなどが行われたせいか、さほどフィーリングとしては悪くはない中、持ち込みセットを確認することになった。しかしながら、周回を重ねるごとにタイヤのラバーが乗ってくるという変化も少なかったようで、セッション中はタイムの上がり代も控えめ。その一方で、チームではセットアップの作業が進み、良い方向でのセットアップを確認した後にタイヤ確認の作業に入るなど、順調にメニューを消化。脇阪もユーズドタイヤ&燃料満タンでのフィーリングを確認しながら安定したタイムを刻み、手応えある様子を見せた。結果、このセッションでは石浦選手がマークした1分56秒710がトップタイムとなり、その後の予選に向けて、弾みをつける形で公式練習を終えることになった。



【ムックアウト予選 (Q1)】 6番手 / 1'56.054

ムックアウト方式の予選は午後4時45分にスタート。気温は公式練習時と同じく33度ながら、路面温度は同比で6度低い37度。選択したタイヤと路面とのマッチングが気になるところ。だが、Q1を担当する脇阪はタイミングをしっかりと見極めてコースイン。いわゆるタイヤの“おいしいところ”をキチンと引き出せるよう、満を持してアタックに入った。最初のアタックで1分56秒325を、さらにもう1周アタックを続け、1分56秒054のタイムを刻む。研ぎ澄まされた感覚の中で生まれたこのタイムを持ってNo.39 DENSO KOBELCO SC430は6番手でQ1を通過。石浦選手へとバトンが託された。

【ムックアウト予選 (Q2)】 4番手 / 1'55.751

Q2は午後5時30分にスタート。気温32度、路面温度38度とQ1とほぼ同じコンディションの中、石浦選手がコースに向かう。周回する中で、今、どのようなアタックコンディションかを把握した上でタイムアタックを行い、刻んだタイムは1分55秒751。この結果、No.39 DENSO KOBELCO SC430は4番手のポジションを獲得。決勝に向けてひとつの流れがしっかりと見えている中で掴んだ好位置で、明日の決勝を迎えることになった。

初日のセッションを終えた脇阪は、「公式練習で色々なものが見えたのが良かった。コースに対するクルマの合わせ込みやタイヤ選択など、今はキチンとした方向性が見えており、ステップ・バイ・ステップでクルマを作り上げることができた」と、まず最初のセッションで大きな手応えを感じたことをひとつのポイントとして挙げた。それに加え、「今、とても気分よくクルマに乗せてもらっています。もちろん、理想を言えばキリはありませんが、着実に確実に取り組んでいることばかりなので迷いがない。それがいいんだと思います」と安定して闘いに挑めることを喜んだ。予選結果に関しては「数字だけを見ると、練習走行でトップタイムを出したために、予選の順位はガッカリされるかもしれませんが、チームからすると極めて順調です」とキッパリ。また、決勝に向け、「しっかり戦える方向にクルマのセットを調整できれば勝利することも夢ではありません」と力強くコメントした。



■ 6月16日(日)

11:00-11:30 フリー走行 (11:40-12:05 サーキットサファリ)

16:00- 決勝 (54周)

【フリー走行】 8番手 / 1'59.193

予選日こそ薄曇りの一日だったが、決勝を迎えた日曜はじりじりと強い日差しもあり、マレーシアらしい蒸し暑さが先行する天気となった。午前11時にスタートしたフリー走行では、決勝を想定し、最初に石浦選手がコースへと向かう。タイムこそ8番手に留まったが、決勝に向けて必要な確認内容を確実に消化。決勝に向けて士気を高めることになった。



【決勝】 2位 / 15ポイント獲得（シリーズポイント：26ポイント、シリーズランキング：3位）

午後4時、気温33度、路面温度42度の中、54周にわたる決勝レースがスタート。4番手からスタートを切った石浦選手は、まず後続の1号車GT-Rに先行を許したが、差を開けることなく、トップグループの中でオープニングラップを終える。すると、5周目、その1号車が他車と小競り合いとなり1台が戦線離脱。荒れる展開になるかと思われたが、その後、タイミングを見計らって石浦選手が1号車を逆転。7周目にはスタート時のポジションである4番手へと返り咲いた。その後は後続の100号車 HSV-010 の追撃をシャットアウト、さらに次第にコントロールが難しくなるタイヤをうまくマネジメントし、ポジションキープ。25周を終えてピットに戻り、ルーティンワークを行った。

緊張感が高まる中、チームスタッフは落ち着いてそれぞれの作業を完遂。脇阪がコースへと向かう。多くのライバルがほぼ同時期にピットインを実施する中、極力タイムロスを抑えることに成功したチーム、そしてアウトラップを含め気迫ある走りを脇阪が見せたことにより、No.39 DENSO KOBELCO SC430 は2番手で後半の闘いをスタートさせることになった。

脇阪の目に映るのは、トップを走る12号車のGT-R。揺さぶりをかけるべく猛追を開始、プレッシャーをかけていく。周回毎に2台の差を詰めていく脇阪。あともう少し、あともう一步、と攻め立てていったのだが…。ライバルもその姿を見るや、ペースアップを図り、応戦。結果、惜しくも攻防戦に持ち込むには至らず、このままチェッカーを受けることに。しかしながらセパンで力強い闘いを見せたことによって、No.39 DENSO KOBELCO SC430 は今シーズン初表彰台となる2位獲得に成功した。



「先頭の12号車を追いかけてなかったのですが…。攻めてペースを上げるとリアタイヤがロックするクルマの状態を踏まえながら、前との差を詰めて頑張ったのですが…」とやや悔しい表情を見せた脇阪だが、その一方で、「今週末、チームとしてしっかりと仕事ができたとと思います」と2位表彰台という結果には満足した様子。シリーズランキングも3位へと浮上。SUGO、鈴鹿、そして富士の中盤戦ではさらなる飛躍に期待がかかる。

前回の富士以降、しっかりと見える道筋に沿って闘いを繰り広げることができるようになったNo.39 DENSO KOBELCO SC430。セパン戦ではその成果が2位という結果となって現れたことで、チームとして進化を遂げているのは明らか。中盤戦に向けて、いい弾みをつけることになったといえる。

次戦は、7月27日(土)・28(日)に「魔物が棲む」と言われるスポーツランドSUGO（宮城県仙台市）で開催される。

【Photo Gallery】



